

ハイデルベルク教理問答説教

聖書箇所：出エジプト記34章5～9節；ローマの信徒への手紙5章12～21節

説教題：“神様の義と人間の墮落”

詩編歌

頌栄 - 詩編106編 1、6、7

説教の前 - 詩編128編 1、3

説教の後 - 詩編101編 1、2、6

頌栄 - 詩編4編 2,3

9問：それでは、神は、律法において、人間が行うことのできないことを要求することによって、人間に不正をなしたまうことにはならないでしょうか。

答：いいえ、そうではありません。神は、それを行うことが出来るように人間を、創造されたからです。けれども、人間は、悪魔にそそのかされて、故意の不従順によって、自分自身と、すべての子孫とから、この贈物を奪ってしまったからです。

10問：神はこのような不従順と背反を、罰しないで、見逃そうとなさるのでしょうか。

答：いいえ、決して。神は、人間の生まれながらの罪にも現行罪にも、厳しく、怒っておられます。神は、これらの罪を、正しい裁きによって、この世においても、永遠にも、罰せずにはおられません。神は語っておられます。「律法の書に書かれているすべてのことを絶えず守らないものは皆、呪われている。」

11問：神は、憐れみ深いお方でもあるのではないのでしょうか

答：神は、確かに、憐れみ深いお方です。けれども、神は、また、義しいお方でもあられます。それゆえ、神の義は、神の至高の尊厳を犯した罪が、同じく、最高の刑罰によって、すなわち、体と魂への永遠の刑罰によって、罰せられることを要求するのです。

## “神様の義と人間の墮落”

私達は、先月、人に対する神様の意図と人間の墮落に関して学びました。人に対する神様の意図は、私達と契約の中で交わりを持つ事ですが、人間は、その契約を自らの足で蹴りました。それで、その責任を神様に転嫁する人間の愚かさも学びました。予定論を正しく理解せず、“どうせ、神様が全て予定されたのではないのか”というのが、なぜ、間違った考え方であるかも学びました。運命論は、異教的です。私には責任がない。全ての罪さえ神様が定められたと信じるのは、正しい予定論ではありません。それで、私達は、先月の説教を通して、神様は全く私達に対して善を行われたのですが、人間の側から神様から離れて、罪に落ちて、破滅に至る道を選んだことを確認しました。

今日、私たちが共に学ぶ内容は、1) 神様の義、2) 原罪（生まれながらの罪）と現行罪（私たちが生きながら犯している罪）です。二つの主題を今日完全に扱う事は出来ないと思いますが、大切な内容を十分に学ぶことが出来ると思います。

不従順と神様の義

## 1、故意的な不従順

私たちが先月学んだように、人間に対する神様の意図は、私達が神様の契約の中で、生きる事でした。しかし、人間が、自ら、その契約を破壊しました。それを問9に基づいて整理すると次のようになります。“神様は、それを行うことが出来るように人間を、創造されましたが、けれども、人間は悪魔にそそのかされて、故意的な不従順を選びました。”

すなわち、人間が罪を犯して、悲惨の状態に落ちてしまった原因を、神様に転嫁する事が出来ない理由は、神様が人間を創造された時、“行うことが出来るように”造られたからです。責任は、神様にあるのではなく、人間にあります。それで、問9の答えの中で、私たちが注意を払わなければならない言葉は、“故意”という言葉です。人間は、神様との契約を完全に守る事が出来る存在として創造されました。しかし、“故意的に”神様との契約を破壊したことから、罪の根本的な本質を見出すことが出来ます。

皆さん！“故意”という言葉を確認して下さい。“故意”という言葉には、意志的という意味が含まれています。私たちの先祖アダムは、悪魔に唆されて、あるいは、失敗して神様を背反したのではありません。むしろ、強い意思を持って、神様に逆らいました。アダムは、ある道を歩いている時、“危ない”と表示されていない、マンホールに落ちたのではありません。アダムは（仮に周密な計画を立てたのではありませんが。）強い意志を持って罪を犯したのです。

「ハイデルベルク教理問」は、色々な国の言葉で翻訳されました。教理問答を翻訳した人々は、この部分を強く強調しました。ドイツ語 (mutwilligen) とオランダ語 (moedwillige) には、英語の “willful” という意味が含まれている言葉を使っています。ドイツ語の ‘mutwilligen’ は、“危険に向かって猪突的に飛びつく” という意味です。すなわち、教理問答の“悪魔に唆されて故意の不従順によって罪を犯した。” という意味は、失敗して罪を犯したという意味ではありません。計画的な意図と意志を持って、それを実行する為に猪突的に飛びついたという意味です。

アダムは絶対に被害者ではありません。アダムは、悪魔の罠にかかったこともありません。また、アダムは、悪魔の誘惑に抵抗出来ない状態でもありませんでした。アダムは、実に、神様が与えてくださった一番強い権威を持って、この世を統治する統治者でした。それだけではありません。神様は、アダムを、神様の像に似せて“義と聖において”創造してくださったので、いくらでも、悪魔の誘惑に打ち勝つことが出来ました。しかし、アダムの心には、‘神様のようにになりたい’ という強烈な熱望が火のように燃え上がって、禁止された善悪の木の実を食べてしまいました。それで、アダムの最初の罪は、“故意的な不従順”です。

## 2、神様の義

この時点で、私達は神様の義に対して考えなければなりません。人間が犯した故意的な罪に対する神様の義の意味です。

### 1) 意味

聖書で“義”という言葉は、いつも二つの言葉で説明されています。創世記18章には、神様がアブラハムに神様の御国に対して教えられる内容が記されています。神様は、御自身の御国を“正義と公正”の国だと語れました。

19 わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである。

新改訳の聖書を見ます。

19 わたしが彼を選び出したのは、彼がその子らと、彼の後の家族とに命じて【主】の道を守らせ、正義と公正とを行わせるため、【主】が、アブラハムについて約束したことを、彼の上に成就するためである。」

ここに記されている“正義と公正”二つの言葉が、聖書が示している“神様の義”の意味です。

その二つの言葉は、創世記18章だけではなく、イザヤ書9章7節にも記されています。来られるメシア、すなわち、イエス・キリストが来られて建てられる御国を説明する時、使われます。イザヤ書9章7節です。新改訳聖書です。

7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。

“裁き”という言葉の原文の意味は“公正”です。

私達は、神様が成し遂げられると語られた御国、イエス・キリストが完成される御国の特徴が“正義と公正”であることを確認しました。

では、皆さん、考えてみましょう。神様がアブラハムに教えて下さった御国は“正義と公正”の国でした。そして、イエス・キリストが来られて完成される御国も“正義と公正”の国です。二つの言葉は、神様の性質を表す時、使われる言葉です。すなわち、神様が、アブラハムに教えられた御国も、イエス・キリストが成し遂げられる御国も、神様の性質が具現される国を意味します。

神様の義は、正義と公正であり、神様の御性質を表す言葉です。

## 2) 義の要素

一つ目、神様の義には、**神様も御自身が制定された律法に忠実に従うという意味が含まれています**。神様は、律法の上におられるお方です。それで、人だけに法律を守る事を強要して、ご自身は自由に生かれることが出来ます。すなわち、神様は、律法を制定された張本人ですが、その法律を無視して、勝手に生かれるお方ではありません。神様も、ご自身が制定された律法に忠実に従われます。

二つ目、神様の義には、**裁きが含まれています**。神様の義は、定められた法律に従う事、守る事を意味します。それで、法律を守った時には、賞が与えられますが、法律を守らない時は、罰が与えられます。神様も御自らその法律の下におられますが、一回も、法律に反した事はありません。神様は、人が法律に反する時、必ず、その責任を問われます。それが神様の義です。

三つ目、最後に神様の義の特徴は、意外な所で現れます。神様の義は、罪を裁く時だけに現れるわけではありません。**罪を赦して下さる時**にも現れます。“イエス・キリストの血潮によって罪が赦される。”という原則も、神様の律法の下に、私たちがいる時、有効です。すなわち、神様が私たちの罪を裁く時にも、私たちの罪を赦して下さる時にも、神様の律法の下で行われます。ヨハネの手紙一1章9節は、罪の赦しと義の関係を具体的に示しています。

“9 自分の罪を公に言い表すなら、**神は真実で正しい方**ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。 10 罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであり、神の言葉はわたしたちの内にありません。”

神様が私たちの罪を赦して下さる時、示して下さるご性質は、“義”です。神様のご性質である義によって罪人は滅ぼされ、また、その義によって、罪人が救われます。

### 3、その義が“故意的な罪”に適用される

それでは、更に、故意的な罪を考えて見ます。私達は、アダムの罪が、“故意的（彼の強い意志が含まれた行動）”だと学びました。また、私達は、神様がどう言うお方であるかをも学びました。神様は義の神様です。神様は、私たちの不従順に対して必ずその責任を問うお方です。なぜなら、神様は、人に、罪に打ち勝つことが出来る十分な力を与えて下さったのですが、人が“故意的”に神様に逆らったからです。

**アダムの罪に対する神様の義は何ですか。**「ハイデルベルク教理問答」の問10の答えは、神様の義を正しく記しています。

問10です。「神はこのような不従順と背反を、罰しないで、見逃そうとなさるのでしょうか。」

質問の核心は、神様の義に対する質問です。もし、神様が、ご自身の法律を御自ら見逃すことが出来るのかと言う質問です。答えを見ましょう。

“いいえ、決して。神は、人間の生まれながらの罪にも現行罪にも、厳しく、怒っておられます。神は、これらの罪を、正しい裁きによって、この世においても、永遠にも、罰せずには置かれません。神は語っておられます。「律法の書に書かれているすべてのことを絶えず守らないものは皆、呪われている。」”

神様は、全ての法律を制定された張本人です。神様は、ご自身が制定された法律に御自らご自身を締められました。すなわち、全ての法律を制定された神様が御自ら徹底的に法律に従順に従うお方であるという意味です。それで、神様は、ご自身が制定された法律を見逃すことが出来ませ

ん。その法律を違反した行為に対しては、必ず、罰が与えられます。その罰は、**神様が私たちが意地悪為に作った罫ではありません。神様が完全な公正の神様なので、必ず、存在しなければならない必然的なものです。**

それで、ハイデルベルク教理問答は次のように答えています。

“いいえ、決して。神は、人間の生まれながらの罪にも現行罪にも、厳しく、怒っておられます。神は、これらの罪を、正しい裁きによって、この世においても、永遠にも、罰せずには置かれませんが、神は語っておられます。「律法の書に書かれているすべてのことを絶えず守らないものは皆、呪われている。」”

これが、アダムがエデンのそので犯した罪であり、また、その罪に対する神様の義です。神様は義であるお方です。人間は、不従順であり、神様の法律によって裁かれる存在になりました。ハイデルベルク教理問答は、その事実を次のように記しています。“これらの罪を、正しい裁きによって、この世においても、永遠にも、罰せずには置かれませんが。”

## 原罪と現行罪

ハイデルベルク教理問答は、問10で、神様の義が**どこに適用されるか**を説明します。それを説明するために、“原罪<sup>1</sup>”と“現行罪<sup>2</sup>”と言う言葉を使っています。

すなわち、神様は、原罪と現行罪、両方に対して怒りを現されるという事です。この意味をもっと具体的に学びます。

### 1、現行罪を大切に**する風潮**

まず、私達は**原罪と現行罪**が何であるかを学ぶ必要があります。“原罪”は、アダムがエデンの園で犯した罪、すなわち、善悪を知る木の実を取って食べて、神様との契約を破壊したことです。罪がこの世に入り込んだ原因になる事件です。そして、“現行罪”は、原罪の為に、本性が腐敗してしまった人間が自ら犯した罪と犯す全ての罪を意味します。それで、原罪は、アダムが犯した罪を意味し、その後、私たちを含めて、全ての人がそれぞれ犯す全ての罪を**現行罪**と言います。

ハイデルベルク教理問答は、“神様は、罪に対して裁きを行うお方”だと記していません。神様は、“**原罪と現行罪に対して裁きを行うお方だ。**”と記しています。ハイデルベルク教理問答がそのように**原罪と現行罪**を共に強調している理由は、当時の歴史的な背景の為です。この教理問答が作成された時、**中世のローマ教会は、現行罪のみを強調する傾向がありました。**

それに関して正しく理解するためには、ペラギウス主義に関して学ぶ必要があります。ペラギウスは、アウグスティヌスと言う有名は神学者と論争をした古代教会の有名な異端です。ペラギウス主義が主張した一番基礎的な間違った教理は、“**アダムが犯した罪は、永遠の罰を招くものではない、また、その罪も子孫に遺伝しない**”と言うことです。聖書の教えと正反対でした。

1 人の生まれながらの罪

2 人が生きながら犯す罪

ペラギウス主義は、教会によって戒規かいぎされましたが、その後、“半ペラギウス主義”という思想しそうが発生はっせいしました。“半ペラギウス主義”は、“半分ペラギウス主義”とも言われました。彼らは、主張しやうしました。“墮落だらくのせいで、人間は、本来の美しさを失ってしまいましたが、完全に失ったのではない”と言うことです。人間は墮落だらくしましたが、相変わらず、その心には自由意志あいかと元の善を持っているので、誰かが導いてくれると、いつでも、善を行うことが出来ると理解りかいしました。

ペラギウス主義と半ペラギウス主義が持っていた信仰とは、“私達は出来る”と言うことです。人間は墮落だらくによって完全に死んだ存在ではないので、いつでも、気持ちを引き締めると善を行うことが出来ると言うことでした。彼らは、人間が持っている力と能力を強調きょうじょうしました。

これが、中世ちゆうせいのローマ教会が、原罪げんざいと現行罪げんこうざいの中で、原罪を軽くして、現行罪げんこうざいだけを強調きょうじょうした風潮ふうしやうを生み出した原因げんいんです。

原罪が全ての人間ちからづよを力強く死に追い出したので、その原罪から現行罪げんこうざいが生まれ出されました。つまり、改革派の教理は、現行罪げんこうざいの源は、原罪げんざいだと言います。しかし、中世のローマ教会は、そのように言う事を快く思いませんでした。中世のローマ教会は、“原罪は、人間の全体の中で一部分ぜんたいだけを破壊はかいした”と教えました。人間は、全体的に腐敗ふはいしたのではなく、一部分いちぶぶんだけが墮落だらくしたと教えました。それで、ローマ教会は、人が、心を尽くすと善を行うことが出来るので、その行いを通して神様を喜ばせることが出来ると教えました。神様の民になり、子供になること、また、救われることも、人間の力と行いによって可能であると教えました。

それで、中世のローマ教会は、原罪うすを薄めて、現行罪げんこうざいを強調きょうじょうしました。それで、彼らは、人の前で、公に罪を告白し、断食をし、修道生活しゅうどうせいかつをして、自分自身の救いを成し遂げる為に、最善を尽くしたのです。「ハイデルベルク教理問答」が原罪と現行罪、両方を強調している理由は、偏向へんこうした中世のローマ教会の教えと闘たたかう為でした。

## 2、改革信仰が原罪をより大切に教えている理由

### “腐敗”の意味、“流れ出る”

それで、改革信仰は、聖書の教えに基づいて、原罪をより大切に教えています<sup>3</sup>。なぜなら、現行罪は、原罪が源であるからです。全ての罪の起源は、原罪です。私たちの心の奥底にある罪と、私たちが行っている全ての罪の根ねは、アダムが犯した原罪げんざいにあります。それで、ローマの信徒への手紙は次のように教えています。5章12節です。

“ 12 このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。 ”

<sup>3</sup> 罪の重さに差異があると言う意味ではなく、論理的にそうであると言う意味です。

聖書は確かに教えています。“一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだ”と。ローマの信徒への手紙5章14節も見ましよう。

“14 しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。”

これが聖書が教えている原罪です。

それで、私達は原罪を**腐敗**とも言います。腐敗という意味は腐ったという意味です。私達は、私たちがアダムと全く関係のない存在だとは、言いません。また、アダムが犯した罪が私たちに遺伝されたことも認めます。また、私たちに善を行うことが出来る力があるとも主張しません。私達は、聖書の教えをそのまま信じて受け入れています。聖書は、“私達はアダムが犯した罪のために、病気になったと教えるのではなく、罪の中で死んだ”と教えています。<sup>4</sup> それで、アダムが犯した罪によって全世界は、完全に、腐敗して、何の希望もない状態に落ちてしまいました。それで、全ての人間は、生まれながら、神様に反逆する傾向を持つようになったのです。私達は**原初的に腐敗**しました。私たちが行う全ての現行罪は、アダムが罪を犯した時、世界に入った罪に基づいています。それで、私達から、いつも、善ではなく、腐敗したものだけが生まれ出されます。それが、私たちが信じている罪に対する信仰であり、「ハイデルベルク教理問答」の教えです。「ハイデルベルク教理問答」は確かに教えています。神様は“原罪と現行罪”に対して怒りを現されますと。

### 整理：関係の言葉を用いて

最後に今までの内容を整理します。先月学んだ“関係”という言葉を持って整理したいと思えます。原罪は何でしょうか。なぜ、原罪が、私たちの全ての罪の原因になるのでしょうか。原罪はウイルスのようなものではない、神様との関係が破壊された結果です。関係が破壊されて、神様から離れてしまったので、私達はこれ以上善を行うことが出来ないようになりました。私たちの全ての罪が原罪に根を下ろしているという意味は、善の源である神様から完全に離れて、罪だけを吸い取る存在になったという意味です。なぜなら、神様との関係が完全に断絶されたからです。その断絶された関係は、私たちの力と行いによって回復できるものでは決してありません。なぜなら、人間は、原罪のために悪のみを行う存在になってしまったからです。

しかし、神様は、私たちを本当に愛しておられるので、私たちが、その罪のために滅ばされないように、独り子であるイエス・キリストをこの世に遣わして下さいました。そのイエス・キリストも、父なる神様の御心に従って、私たちをその罪から救ってくださる為に、快く十字架の上で死んで下さいました。それが、私たちが一生忘れてはならない、神様の恵みです。アーメン

<sup>4</sup> エフェソの信徒への手紙2章1節：さて、あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。